



ティー・ブレイク

NO. 85

炎 色 反 応

高校生のある一時期、ガラス細工に凝っていて、放課後になると化学実験室に飛んで行き、バーナーの炎の中でガラス管を回していた。

ある日、ガラス細工の中でもひとつのハードルとされている T 字管の「つなぎ」にチャレンジしていると、化学研究部の連中が入ってくるなり、いきなり「ドライアイスをもたらしたから、これを使ってスパークリングワインを作ってみよう」と言い出した。けれども、その時点では丁度、T 字管の「つなぎ」に四苦八苦しているところであった。

メンバーは、アルコール水に果実エキスを加えたものにドライアイスを入れ、蓋をして中庭に出た。あまりきつく蓋をしてしまうとビンが破裂してしまうので、ある程度ゆるく栓をしておく。そして、ビンの内圧によって蓋のゴム栓が飛ぶ度に、また蓋を閉めなおす。その際に、ゴム栓がどこに飛ぶかが分からないので、中庭のような広いところにビンを置き、その周りを幾人かで取り囲み、ゴム栓が飛んだ位置に居る者がそれをキャッチする。

連中が中庭に出てから暫くして、蓋のゴム栓がポンと飛ぶ音と、それをキャッチする仲間達の歓声が聞こえてきた。その一方で、T 字管の接続は中々うまく行かない。つなげたとんでも、微細なひびが入っていたりする。

ソーダガラスは、成分中のナトリウムによってオレンジ色に発色する。彼らの歓声が大きくなるに従って私のイライラも大きくなり、ついに私の感情も、熱を持ったオレンジ色に発色した。そして、「静かにしてくれ！」を言い中庭に出た。

ところが、彼らがあまりに楽しそうな様子で「一緒にやろうよ」と誘うものだから、私もいつまでも熱発色をさせているわけには行かず、半ばつられたような感じで、私はそのサークルの中に入った。

人間の心も、ガラス細工である。暖めれば柔らかくなり、加熱し過ぎれば歪む。その一方で、できたものは、繊細で細やかなものほど美しく、そして壊れやすい。暖め方を間違えれば変なふうに変形してしまうし、加熱途中で力を入れるタイミングを間違えると、折れてしまったりする。また、きれいに対合させることはかなり難しく、単純ではない。

同様に、スパークリングワインも単純ではない。香料の入ったアルコール水に炭酸を吹き込めばスパークリングワインができるほど世の中あまくはなく、ごく普通の高校生の発案と作業によって最終的にできたものは、とても飲めたしろものではなかった。

最初のチャレンジャーは一口含んで吐き出し、2 番目以降の者はそれがまずいものであることを承知しながらも、途中参加の私も含め、全員がその結果を味わい、失敗の現実を共有した。そうして、できたワインの味をけなしながらも、発案者の責任と浅はかさを追及する者は居らず、互いに肩をたたきあって途中のエピソードを英雄談のようにわめきあった。そうしてそれから炭酸飲料作りをやることは二度と無かったが、もう一度 T 字管の「つなぎ」にチャレンジをしてみたら、今度はなぜかうまく行った。

(正)